



TITLE:

安寧の都市、次のステージへ: あと
がきにかえて

AUTHOR(S):

土井, 勉

CITATION:

土井, 勉. 安寧の都市、次のステージへ: あとがきにかえて. 安寧の都市 -
-医学・工学からのアプローチ (Liveable Cities) 2015: 222-222

ISSUE DATE:

2015-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193485>

RIGHT:

安寧の都市、次のステージへ

あとがきにかえて

土井勉 安寧の都市ユニット 副ユニット長／京都大学大学院工学研究科 特定教授

『安寧の都市——医学・工学からのアプローチ』をお届けいたします。

本書はこれまで発刊してきた『安寧の都市研究』の体裁をA4判の論文集・学会誌の形式からA5判の書籍形式に変更して出版したものである。これは、2015年3月末日に安寧の都市ユニットが終了することに伴って最終号となるために、ユニットの活動に関わりのある多くの方がたからの論文や記事を掲載し、読みやすいものとすることを意図したからである。

ご多忙のところ、厳しい日程であったが、原稿の作成や校正などでご協力をいただいた執筆者のみなさまにお礼を申し上げる。

＊

京都大学大学院工学研究科・医学研究科「安寧の都市ユニット」は2010年春に発足し、この年の10月に第一期生を受け入れて講義がスタートした。そして、2015年3月をもって5年間の活動を終了することになる。この間、行政、企業、NPOなどさまざまな分野の社会人の方がたに大学院生を加えた合計104名（第五期生については予定）が、安寧の都市クリエイターとして巣立たれたことになる。こうした熱心な履修生のみなさんの参加があったからこそ、ユニット活動のポテンシャルを高く維持することができた。時間のやり繰りをして履修生として参加いただいたみなさま、ならびに履修生の参加を支えていただいた出身組織や上司のみなさま、ご家族のみなさまに厚くお礼を申しあげたい。

ユニットの活動として、この5年間に合計38回のセミナーやシンポジウムを開催することができた。行政の第一線でご活躍されている富山市長・森雅志氏、武雄市長（当時）・樋渡啓祐氏、京都市長・門川大作氏をはじめ、産業界や学会の最前線で活躍されているみなさまを講師としてお迎えすることができた。こうしたセミナーやシンポジウムにおける講演の一部は、『安寧の都市研究』のバックナンバーに収録されている。ご関心のある方は、京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI 紅」で公開されているので、検索いただければ幸甚である。毎回のセミナーやシンポジウムにおいてスタッフとして関わった私自身が、講演を聴くことで自分の研究や教育活動の見直しの契機となるなど、毎回、多くの学びや刺激を得ることができた。お忙しい時間を調整して魂魄のご講演をいただいたみなさまに対して、心からお礼を申しあげたい。

合計で約550コマにのぼる講義では、ユニット関係教員だけでなく、さまざまなみなさまから授業をしていただいた。工学系の私にとって、医学系の先生方の講義

を聴かせていただき、介護、ロコモティブシンドローム、脳の活動などの知識を得たことは、自身の視野の拡大に極めて有意義であった。多くの先生がたに、ご自身の研究の最新成果をわかりやすく90分でお話をしていただくことができたからである。さまざまな背景や専門分野をもつ各年次の履修生からも、各講義の内容について多くの気づきがあったことを評価する声が多くある。高い水準の講義をしていただいた先生方にも、厚くお礼を申しあげたい。

また、ユニットの活動でユニークだったもののひとつに、社会人履修生にとっては卒論・修論に該当する「実践プロジェクト」の研究活動とともに、「対話」の授業がある。これは、講義でもなく演習でもなく、参加者が相互に学び合える形態を模索した結果、教員と参加者だけでなく、参加者が意見交換することで「互学互習」することを意図したものである。

これは、通常の講義時間である90分間の枠の2コマ分に相当する180分間を使い、工学と医学などの異なる専門分野の講師2名による話題提供と、出席者全員の対話を行う形式の授業である。各回のテーマも、「高齢者(身体機能と住居・生活)」、「景観と感性」、「ICTと高齢化社会」など、分野融合的かつ最新の研究を紹介するものとなっている。参加者が自身の考えを自由に語り、ときに賛同し、ときに異なる意見を述べ合うことで、自身の考えの枠を見直す場となることを期待したものである。この対話型授業をととして、他者の意見を傾聴することや、短時間で自身の意見をわかりやすく表現する訓練にも効果があったと考えられる。

ユニットの活動期間の5年間で忘れることができないことは数多くあるが、もっとも大きな出来事は、2011年3月11日の東日本大震災である。緊急時のクライシスマネジメントは平常時のアメニティの高さと関係することや、地域コミュニティの重要性という安寧の都市の理念を、この震災・津波被害や、いまだ道半ばである復興活動を通じて再認識することになった。被災からの早期の復興に少しでも役だてること、さらにはこれからも起こると思われるさまざまな災害に対するそなえについても、安寧の都市ユニットで蓄積された活動や知見が有用であるものと考えられる。

＊

ユニットが終了しても、安寧の都市の意義がなくなるものではない。むしろ、これまで以上に多様な場で安寧の都市の概念が拡大し、社会に有用なものとして活用され则认为している。そして、本ユニットで身につけた安寧の都市の考え方をもとにして、さまざまなかたちで社会に有益な活動をととしてお返しすることが、われわれに課せられた使命である。

この書籍の企画から発行までの多様な局面で関わっていただいたみなさま、そして、この書籍を手にとっていただいたみなさまに、心から感謝を申しあげたい。ありがとうございました。